

学位論文要旨

<身体教育>の視点から見た日中の近代教育思想と
学校教育の実践に関する研究

広島大学大学院教育学研究科
学習開発専攻

邨 向東

2014

I. 論文の目次

序 章

- 第一節 研究の背景と目的
- 第二節 先行研究の検討
- 第三節 研究の方法
- 第四節 <身体教育>の視点の設定

第一章 <身体教育>の視点による日本の近代教育思想の枠組み

- 第一節 明治新国家のもとでの教育思想—実学主義—
- 第二節 大正デモクラシーの自由教育思想
- 第三節 戦前・戦中の極端な国家主義・軍国主義の教育思想
- 第四節 戦後の民主主義の新教育思想
- 第五節 まとめ

第二章 <身体教育>の視点による中国の近代教育思想の枠組み

- 第一節 近代国家建設のための教育思想
- 第二節 デューイのプラグマティズム教育思想の影響
- 第三節 三民主義ならびにマルクス主義と共産党の新民主主義教育思想
- 第四節 新中国の素質教育思想
- 第五節 まとめ

第三章 日本の学校教育の実践に見られる<身体教育>の様相

第一節 小学校における教育実践

- 第一項 体育
- 第二項 国語
- 第三項 音楽
- 第四項 道徳

第二節 中学校における教育実践

- 第一項 体育
- 第二項 国語
- 第三項 音楽

第四項 道徳

第三節 高等学校における教育実践

第一項 体育

第二項 国語

第三項 音楽

第四節 まとめ

第四章 中国の学校教育の実践に見られる〈身体教育〉の様相

第一節 小学校における教育実践

第一項 体育

第二項 国語

第三項 音楽

第四項 道徳

第二節 初級中学校における教育実践

第一項 体育

第二項 国語

第三項 音楽

第四項 道徳

第三節 高級中学校における教育実践

第一項 体育

第二項 国語

第三項 音楽

第四項 道徳

第四節 まとめ

終章

第一節 本研究のまとめ

第二節 中国の学校教育の展望

第三節 今後の課題

参考文献

Ⅱ. 論文の要旨

序 章

本研究は、以下のことを研究の目的とした。

(1) 日本と中国の近代教育をめぐる言説を近代教育思想と捉え、教育の現実性・具体性・全人性に着目する〈身体教育〉の視点から、日中の近代教育思想の枠組みを明らかにする。教育思想は、教育の実状を映し出すとともに、教育の現実を生み出す力を持っている。教育思想の枠組みを明らかにすることは、これからの教育の展望を図る上で重要な課題である。

(2) 「感覚」「表現」「技能」「全人性」という〈身体教育〉の具体的な視点から、日中における小・中・高の体育、国語、音楽、道徳教育の実践について調査を行うことにより、日中の学校教育の実践の比較を通して、中国の学校教育の現状の理解とこれからの展望を考察する。それは、中国のこれからの学校教育はいかなる方向に進むべきか、を明らかにする、一つの試みである。

研究の方法としては、まず、序章で本研究のキーコンセプトである〈身体教育〉の視点の設定を行った。また、第一章、第二章で日中の近代教育思想を〈身体教育〉の視点から考察し、両国の近代教育思想の枠組みを明らかにした。さらに、第三章、第四章で日中の小学校、中学校、高等学校の教育実践を観察し、〈身体教育〉の現実化の様相を考察した。〈身体教育〉の視点が見出されると思われる体育、国語、音楽、道徳の授業を観察した。

〈身体教育〉の視点とは、具体的には以下の4点から構成される。

(1) 「感覚」

「感覚」は、視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚の五感や感情と関係しており、個人の主体的経験の出発点である。知識は感覚的知覚に依拠し、感覚は身体に属す。

(2) 「表現」

樋口によれば、学校教育における曖昧な表現概念は、①音楽、美術、文芸などに関係するいわゆる芸術における表現と、②日常的な会話や何らかの発表の場などで自分の考えたことや調べたことを表明し主張するという意味での表現に分けることができる。〈身体教育〉の視点としての「表現」は、芸術における表現だけでなく、日常生活の行為としての表現をも含み、また内から外への表出と、外から内への再現の両者を契機として有するものである。

(3) 「技能」

「技能」は、学校教育において、音楽、美術、保健体育といった教科に特有の音楽、造形、身体運動などの直接的な技能と、技術・家庭に見られるような生活の技能と「できること」一般を含んだ包括的な生の技能に分けることができる。樋口によれば、「表現」と同様に、個別の技能は、包括的な生の技能によって相対化される必要があり、個別の技能の内実を探ることによって、包括的な生の技能にもつうじめるような原理的なことがらを析出すべきである。「技能」は、「わかる」と関係した包括的な生の技能に見出されるものであり、これを<身体教育>の視点の一つとすることができる。

(4) 「全人性」

「全人性」とは、教育の全体像と人間形成に関わる視点であり、知の身体性に依拠し、知識や技能などの統合性を意味している。

第一章 <身体教育>の視点による日本の近代教育思想の枠組み

本章では、明治新国家、大正デモクラシー、国家主義・軍国主義、戦後民主主義の4つの時期の教育思想の特徴を取り上げ、「感覚」「表現」「技能」「全人性」という<身体教育>の視点から、その枠組みと考えられるものを析出することを目的とした。

明治新国家の教育思想については、実学主義がその特徴と考えられ、素朴な形ではあっても、「感覚」と「表現」「技能」の重視が見られた。「全人性」は国家に対する個人へのまなざしの生成という形で観察された。

大正デモクラシーの教育思想については、芸術という活動が中心に据えられ、「感覚」「表現」「技能」「全人性」は一つの開花の姿を見せた。しかし、それが「芸術」を中心になされたことによる限界も、抱えていることが明らかになった。綴方教育や児童画教育が持っている可能性が、改めて<身体教育>の視点から考察されなければならないこともわかった。

国家主義・軍国主義の教育思想については、すべてが国家主義体制に組み込まれていく中、教育も例外ではなく、その方向性の中に飲み込まれていったことが改めて確認された。しかし、その方向性の中で、形の上では、「感覚」と「技能」の重視、さらに国家を支える「全人性」が観察された。

戦後民主主義の教育思想については、教育界の振り子現象の中に、どちらの極においても「感覚」「表現」「技能」「全人性」が観察されることが明らかになった。児童中心主義とか経験主義といった形にとらわれずに教育を観察すべきことを、<身体教育

>の視点は教えるのである。

<身体教育>の4つの視点の組み合わせの「形」とでも言うものが、本論文でいう教育思想の「枠組み」である。「全人性」は、教育を飲み込む社会や時代の状況によってその実態は違えたにしても、必ず強調される視点である。次に重要視されやすいのは、「技能」である。何か「できる」ようになることは、教育の重要な機能であると考えられやすいからである。「技能」はむしろ「表現」と一体化して捉えられるべきであるが、この「表現」は、芸術的な表現に回収されてしまいかねない。そして、最も見逃されやすいのが「感覚」である。実際には「感覚」の上に知的な活動は成り立っているのであるが、それがほとんど意識されないのである。

本章で明らかになった「枠組み」を使って、これからの教育を考える上での示唆は、教育には必ず付いて回る「全人性」といった観念を安易に使用するのではなく、「感覚」という具体的な手がかりにより注目することと、「技能」と結び付いた「表現」を、さまざまな教育活動の中に具体的に構築していくことであろう。

第二章 <身体教育>の視点による中国の近代教育思想の枠組み

本章では、近代中国（1840年～）における教育思想の枠組みとして、近代国家建設のための教育思想、プラグマティズム教育思想、三民主義ならびにマルクス主義と共産党の新民主主義教育思想、素質教育思想の4つが指摘され、<身体教育>の視点から検討がなされた。

「近代国家建設のための教育思想」は、日本の明治時代と同様に、西洋の科学・技術を急速に取り入れようとする社会情勢・時代情勢から生まれたものである。その後、デューイの中国訪問と民衆による反帝反封建運動である五四運動は、国家から民衆へと視線が向けられる重要な契機を作り出した。それが「プラグマティズム教育思想」である。それは、日本の大正デモクラシーにおける新教育運動と並行的に理解されるが、しかし、不安定な国家の状況は国家主義をも同時に強化していくことになっている。「三民主義ならびにマルクス主義と共産党の新民主主義教育思想」は、時代的狀況を色濃く反映したものである。人間の全面発達が強調されるが、いずれにしてもマルクス主義の形式主義を逃れるものではない。こうした国家と民衆との対決という図式は、「素質教育思想」にも見出すことができる。「応試教育」対「素質教育」という対立図式は、体系的な教師主導型の教育か児童中心主義の教育か、という振り子現象と重ねて理解することもできるだろう。国家主導というベクトルと、それに対する抵抗

運動というベクトルを、近代中国の教育思想の流れには見出すことができるのである。

以上の教育思想の流れを、「感覚」「表現」「技能」「全人性」という〈身体教育〉の視点から検討してみると、いずれの枠組みにおいても全人性の強調は見られるが、それは十分でないことが明らかになった。これを乗り越えるためには、子どもの全面的発達を表面的に強調して、全人性という概念を抽象的に振り回すのではなく、〈身体教育〉を構成する他の契機、すなわち「感覚」「表現」「技能」を教育実践の中に具体的に実現していく可能性を探ることが重要だろう。

第三章 日本の学校教育の実践に見られる〈身体教育〉の様相

本章では、〈身体教育〉の視点により、日本の小学校・中学校・高等学校における体育・国語・音楽・道徳（高等学校を除く）の授業についての考察を行った。

「感覚」という視点から見ると、体育における筋肉運動の感覚、国語における発音の感覚、音楽における音色や響きの感覚、道徳における他者の気持ちを受け取ったり、共感したりする感受の感覚などは、各授業からよく見出すことができた。感情につながる楽しさなどが重視されるのは、中・高等学校より小学校においてである。

「表現」と「技能」については、教科に特有に見られる狭い意味での「表現」や「技能」だけでなく、日常生活での身体運動や言語活動なども念頭に置かれて、「表現」や「技能」が広く理解され実践されていると言える。たとえば、小学校の「とび箱運動」という体育授業では、運動のコツを見つける力をアップすることによって、子どもの生活世界への広がりを目指している。

また、身体運動や楽器の演奏を楽しむこと、文章と向き合い、それに触発されて何らかの行動を起すことなどは、広義の「表現」である。何かうまくできたり、上手にできたりすることだけでなく、課題と向き合い、理解し、繰り返すことによって、自らから形成された体験とその過程の中で、重要な「技能」が生まれてくることが観察された。

さらに、他者の気持ちやアドバイスなどを受け取り、共感することや、自分の考えを発表し、伝えることは、再現と表出をつなぐ「表現」の重要な活動である。それには、「技能」が伴う。それらは、考察した各授業でよく観察された。

「全人性」については、たとえば、7年生と3年生の「いっしょにつくろう ～春夏秋冬～」という音楽の合同授業、中学校2年生のかかわり学習（学級活動）の授業において見ることができた。異学年の合同授業という形で、みんなが一つの課題に向か

って、相手とのやり取りをする中で、「感覚」「表現」「技能」を磨きながら、役割と責任を自覚し、集団生活の向上やよりよい人間関係を作っていくという活動は、「全人性」につながっていると思われる。「全人性」は、具体的な活動に向き合っている自己を、より大きな世界から相対化するところに、その重要な特性がある。ある特定の局所的な一側面への注視ではなく、人間存在全体を観る視点が、そこには含まれるからである。

第四章 中国の学校教育の実践に見られる〈身体教育〉の様相

本章では、〈身体教育〉の視点により、中国の小学校・初級中学校・高級中学校における体育・語文・音楽・道徳の授業についての考察を行った。

「感覚」については、小学校における音楽と体育の授業で、冬の寒さや活発な音楽を感じたり、雪の景色の楽しさを体験したり、運動を楽しむといった目標が掲げられており、子どもの五感から感情への配慮を見出すことができた。

「表現」と「技能」については、小学校の各授業では、重要な「表現」が指摘されていた。しかしながら、初級中学・高級中学校で行われた授業の観察によると、やはり教科に特有に見られる「表現」と「技能」の重要視にとどまっていると言わざるを得ない。また、授業内容の量と流れの速さが求められている現状によって、試験に適応する特殊な「表現」と「技能」を育成する応試教育の影が、しばしば垣間見られる。

「全人性」の視点から見てみると、グループとしての協力や社会生活への対応などの強調において「全人性」への注目が見られるが、「感覚」「表現」「技能」との結び付きが弱く、形式的な理念にとどまっている。

終章

本研究のまとめとして、第一章では、明治新国家、大正デモクラシー、戦前・戦中の国家主義、戦後の民主主義という四つの日本の近代教育思想の枠組みを取り上げ、〈身体教育〉の視点から考察した。また、第二章では、中国の近代教育思想の枠組みを、近代国家建設、デューイのプラグマティズムの影響、マルクス主義の台頭、新中国の素質教育の四つとし、第一章と同じように、〈身体教育〉の視点から検討した。両国の近代教育思想の枠組みの検討から、特徴の重なる現象を見出すことができた。それは、「日本の明治新国家のもとでの教育思想」と「近代国家建設のための教育思想」、

「大正デモクラシーの自由教育思想」と「デューイのプラグマティズム教育思想の影響」、「戦後の民主主義の新教育思想」と「新中国の素質教育思想」であり、日本における「基礎・基本の重視」対「ゆとり教育」と、中国における「応試教育」対「素質教育」という「教育界の振り子」現象である。

第三章では、日本の小・中・高等学校で実践されている体育、国語、音楽、道徳の教育を観察し、＜身体教育＞の視点から考察した。第四章では、中国の小・初級・高級中学校で、同様に、体育、語文、音楽、道徳の授業を観察し分析した。両国の教育実践を観察してみれば、両国とも中・高等学校より小学校で、「感覚」「表現」「技能」「全人性」という＜身体教育＞の視点を重視し実践していることが明らかになった。そして日本でも中国でも、学年と教科を問わず、「表現」と「技能」よりも「感覚」の問題が、今後の展開が望まれるものであり、「感覚」への着目による実践が、教育の現場で求められることが明らかになった。また、日本の場合は、音楽、体育などの教科に特有に見られる狭い意味での「表現」や「技能」だけでなく、日常生活での身体運動や言語活動も念頭に置かれて「表現」や「技能」が広く理解され実践されているが、中国の学校教育（特に初・高級中学校）では、指導案に広い意味での認識が現われたにもかかわらず、教育現場ではまだ即物的で測定可能な「表現」と「技能」に向かう傾向が強く感じられた。さらに、中国では、すでに小学校で＜身体教育＞の具体的な視点が実践されているのを見出すことができるのであり、「感覚」「表現」「技能」「全人性」を、中国の初級中学・高級中学を含めた学校での教育実践の中に具体的に実現していくことは可能であるように思われる。

中国の学校教育の展望は、本研究の重要な課題である。「素質教育」の理念が打ち出され、中国の学校教育においても、児童・生徒の、いわゆる個性や主体性が考慮されるようになってきている。しかし、大学進学等に直接に関わる教科が優先されてしまう現状は、否定できない。この問題意識と背景のもとで、中国の学校教育を改めて見たとき、やはりその展望を開いてくれるのは、＜身体教育＞の思想なのではないかというのが、本研究から導出されたことである。現状では、その「全人性」という視点が、形式的な理念として語られているだけである。これを乗り越えるためには、具体的に、「表現」と「技能」という視点の導入、また日本で現実化されている異なる学級や学年の合同授業のように、多様な形で実践していくことが必要だろう。

体育において「表現」と言った場合、すぐに思い付くのは、ダンスなどの表現運動である。しかし、その他のさまざまなスポーツなどにおける身体運動もまた、児童・生徒、一人ひとりの表現となりうるのである。あるスポーツ運動ができるようになって

ていくことは、そこにある技能の上達の表現以外の何ものでもないし、逆に、運動がうまくできないという場合も、そのことはその人となり表現する重要な機会である。友人を誘って運動を楽しむことも、その行為そのものが、広義の「表現」たりうる。そのような「表現」ができる児童・生徒を育てることが、これからの中国の学校教育においては目指されるべきことがらであろう。それは、国語の「表現」においても同様である。文章を書いて何かを表現するという狭い表現概念に留まらず、文章と向き合い、それから何らかの行動を起すこともまた、重要な表現行為である。また、音楽と道徳についてもそうである。

また、「技能」についても、「表現」と同じ様に言うことができるだろう。何かが「できる」ことが技能を示しているが、バスケットボールがうまくできたり、水泳が上手にできたりすることだけでなく、目の前にある運動課題と向き合い、それを理解し、繰り返し練習し、そして自らの身体において何かに変化する体験を持つこと、それが重要な「技能」の体験である。国語での文字の習得や文章の理解も、この理解と練習の繰り返しで形成される「技能」の問題である。音楽での楽器を演奏することを楽しむといった体験の過程の中で、重要な「技能」が生まれてくる。道徳についても同じように言うことができるだろう。

さらに、「感覚」の問題については、日本の学校教育においても「表現」と「技能」よりも一層展開されるのが必要なことである。これが具体化されるためには、例えば「身体感性論 (somaesthetics)」といった理論的検討が、まずは十分になされる必要があるだろう。中国においても、樋口の『身体教育の思想』の影響のもとで、理論的な関心もたれつつある。この「感覚」の視点が十分に機能するようになるとき、従来の教科の枠組みは揺らいでいくことが予想される。そのとき、知識教科と呼ばれるような教科（例えば国語）と、いわゆる技能教科（例えば体育）が融合現象を見せ、そのとき初めて知識教科への偏向といった学校教育の問題は変質することが予想されるのである。

今後は、「感覚」「表現」「技能」「全人性」を教育実践の中に具体的に実現していく可能性を探ることが、大きな課題として残っている。また、「素質教育」の理念を実践するために、＜身体教育＞の視点から、徳育・智育・体育・美育・労働教育という「五育」の認識と従来の知識観と学習論を見直すことも、今後の課題である。

Ⅲ. 参考文献

- 1) 今井康雄(編)『教育思想史』有斐閣、2009年、240-241頁。
- 2) 及川平治『分団式動的教育法』明治図書、1972年。
- 3) 王国維(1903)「論教育之宗旨」俞玉姿・張援編『中国近現代美育論文選(1840-1949)』上海教育出版社、2011年、9-11頁。
- 4) 王水泉・樋口聡「「身体知」研究のための問題の展望」『体育哲学研究』第41号、2011年、1-10頁。
- 5) 王智新『近代中日教育思想の比較研究』勁草書房、1995年。
- 6) 小原国芳「藝術と教育との本質的關係」帝國教育會編纂『藝術教育の新研究』文化書房、1922年、93-94頁。
- 7) 小原国芳『全人教育論』玉川大学出版部、1981年。
- 8) 小原国芳(編)『日本新教育百年史第1巻総説』玉川大学出版部、1970年。
- 9) 片上伸『文芸教育論』玉川大学出版部、1973年。
- 10) 北原白秋『新興童謡と兒童自由詩』岩波書店、1932年。
- 11) 北原白秋「兒童自由詩に就て」横須賀薫(編)『近代日本教育論集第5巻兒童觀の展開』国土社、1969年、131-138頁。
- 12) 北村光一ほか「日中における高等学校数学教育の現状と課題—滋賀県と貴州省の高等学校を対象として—」『教育情報研究』(日本教育情報学会学会誌)、24(4)、2009年、27-36頁。
- 13) 金一鳴・唐玉光主編『中国素質教育政策研究』山東教育出版社、2004年。
- 14) 教育思想史学会(編)『教育思想事典』勁草書房、2000年、590頁。
- 15) 黄炎培(1913)「学校教育採用實用主義之商榷」陳学恂主編『中国近代教育文選』人民教育出版社、1983年、378-385頁。
- 16) 顧明遠著・大塚豊監訳『中国教育の文化的基盤』東信堂、2009年。
- 17) 蔡元培(1912)「對於教育方針之意見」俞玉姿・張援編『中国近現代美育論文選(1840-1949)』上海教育出版社、22-27頁。蔡元培(1930)「美育」、198-202頁。
- 18) 齋藤秋男「新中国教師の父 陶行知」刀江書院、1951年。
- 19) 佐藤学「「表現」の教育から「表現者」の教育へ」佐伯胖ほか(編)『表現者として育つ』東京大学出版会、1995年、221-238頁。
- 20) 庄エ青ほか「小学校教育における身体表現の取り扱いに関する日中比較研究—体育科と音楽科を対象とした実態調査より—」『広島体育学研究』第29号、2003年、

9-18 頁。

- 21) 鈴木三重吉『綴方讀本』中央公論社、1936 年。
- 22) 体育科と国語科の各年版の『学習指導要領』参照。
- 23) 第 114 回東雲教育研究会指導案集、2008 年。また、その指導案の訂正版を参考にした。
- 24) 多賀秋五郎『中国教育史』岩崎書店、1955 年、方言 158-160 頁、西学 163-165 頁、西芸 166-167 頁、軍備 160-163 頁、軍国民 308-312 頁、職業 296-304 頁、生産 304-308 頁、科学的教育思想 315-321 頁。
- 25) 田中智志「知識一何のために求めるのか」田中智志・今井康雄編『キーワード現代の教育学』東京大学出版会、2009 年、18-29 頁。
- 26) 中華人民共和国教育部のホームページ参照：
http://www.moe.gov.cn/publicfiles/business/htmlfiles/moe/moe_177/200407/2478.html# (2012 年 12 月 25 日取得)
- 27) 「中華民国教育宗旨及其実施方針(1929)」宋恩榮・章咸主編『中華民国教育法規選編(1912-1949 年)』江蘇教育出版社、1990 年、45-46 頁。
- 28) 陶行知(1931)「教学做合一下之教科書」華中師範学院教育科学研究所主編『陶行知全集・第二卷』湖南教育出版社、1985 年、288-303 頁。
- 29) 董宝良・周洪宇主編『中国近現代教育思潮与流派』人民教育出版社、1997 年、西文 42-44 頁、西芸 44-45 頁、軍国民 238-263 頁、職業 287-328 頁、生産 491-523 頁、半工半讀主義 429-456 頁、科学教育思想 398-428 頁。
- 30) 長浜功(編)『史料 国家と教育—近現代日本教育政策史』明石書店、1994 年。
- 31) 2008 (平成 20) 年度広島大学附属中・高等学校教育研究大会要項、2008 年。
- 32) 2009 年 12 月に中国で観察した各授業の指導案を参考にした。
- 33) 2010 (平成 22) 年度広島大学附属中・高等学校教育研究大会要項、2010 年。
- 34) 東広島市立三ツ城小学校教育研究会要項、2009 年。
- 35) 樋口聡「教育における身体と知」『大学時報』56(313)、2007 年、70-75 頁。
- 36) 樋口聡「教職教養としての教師の感性」『グローバル時代における教職教養のモデル構築のための日澳国際比較研究 (科研報告書)』2008 年。
- 37) 樋口聡「芸道論の基底と教育学的地平：倫理的学びと身体の問題」『藝道思想の現代的意義について—日本の発展を焦点として—』平成 15 年度～平成 18 年度科学研究成果報告書、2008 年、14-22 頁。
- 38) 樋口聡『身体教育の思想』勁草書房、2005 年。

- 39) 樋口聡「表現・技能と学習指導」、森敏昭編『21世紀を拓く教育の方法・技術』協同出版、2001年、69-86頁。
- 40) 樋口聡・山内規嗣『教育の思想と原理—良き教師を目指すために学ぶ重要なことから—』協同出版、2012年。
- 41) 広島大学附属福山中・高等学校 第39回中・高等学校教育研究会要項、2009年。
- 42) 福澤諭吉「一身独立して一国独立する事」『福澤諭吉著作集第3巻』、27-34頁。
- 43) 福澤諭吉「教育の目的は実業者を作るに在り」西川俊作・山内慶太(編)『福澤諭吉著作集第5巻 学問之独立・慶應義塾之記』慶應義塾大学出版会、2002年、111-118頁。
- 44) 福澤諭吉「演説の法を勧るの説」小室正紀・西川俊作(編)『福澤諭吉著作集第3巻 学問のすゝめ』慶應義塾大学出版会、2002年、126-129頁。
- 45) 平成22年度幼少中一貫教育研究会要項、2010年。
- 46) 宮原誠一ら(編)『資料 日本現代教育史4』三省堂、1974年。
- 47) 森有礼「學政要領(成案)」大久保利謙(編)『森有礼全集第一巻』宣文堂書店、1972年、355-356頁。
- 48) 森有礼「第一地方部府縣尋常師範學校校長に對する演説」『森有礼全集第一巻』、522-524頁。
- 49) 山本鼎「自由畫教育の使命」志摩陽伍(編)『近代日本教育論集第3巻 教育内容論I』国土社、1970年、130-131頁。